保育園安全だより

ー事故報告よりー

令和 5年 7月～9月分

今年は記録的な暑さが続き、水分補給や熱中症対策も含めて園児の体調管理にいつも以上に気遣われた事と思います。７～９月に発生した各園の事故総数２２７件（９月末日保育課到着分）でした。これから戸外遊びが充実する季節ですので、各園リスクマネジメント力を高めて予防に努めていきましょう。

令和５年度　事故報告書集計（７～９月）

	園内										園外			
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	プール	誤食	その他	道路	公園	その他	計
0歳児	10	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	12
1歳児	45	1	0	0	0	9	1	0	0	1	0	1	0	58
2歳児	32	9	0	0	0	4	8	0	0	1	0	0	0	54
3歳児	23	4	1	0	1	3	5	0	0	0	0	0	0	37
4歳児	12	1	1	0	1	3	9	2	0	2	0	0	0	31
5歳児	17	4	0	0	0	4	5	3	0	2	0	0	0	35
合計	139	19	2	0	2	23	29	5	0	7	0	1	0	227

・・・今回挙がってきた事故報告書の集計から見える、事故が発生する原因とは・・・

1）保育士がその場から動いた瞬間、見ていない時に起きた事故

例…保育士が子どもと座って遊んでいたところに登園してきた子の受け入れの為に立ち上がって遊びから目が離れた瞬間にトラブルが発生してしまった。

2）活動内容と子どもたちの動きに対して保育士の予測不足による事故

例…保育歴の浅い職員に、対応が難しい子どもたちのトラブルの対応を任せてしまい、子どもの動きが予測しきれなかった為に防げなかった。

…職員体制が整う前に、リズム運動のような大きな動きが生じる遊びを始めたことで事故が発生した。（転倒・衝突など）

3）園庭に複数クラスの子どもと保育士の人数も多い中で起きた事故

例…幼児３クラス 45 名と職員８名のように一見保育士の数は多いが、責任の所在が明確でなかったため、事故が起きた様子を誰も見ていなかった。

各園事故報告書を元に、「なぜ事故は起きたのか」、「どうずれば事故は起こらなかったのか」を検証していることと思います。検証する際は、必ず現場に行って、実際に同じ行動をとってみることが大切です。その中で、こうすれば事故にならなかったと思われる行動を具体的に出し合い、動いてみましょう。事故報告書に書かれている内容の確認とそれ以上の気づきが出てきます。実践して具体的に伝えることは、経験の浅い職員や非常勤職員にもわかりやすい方法だと思います。

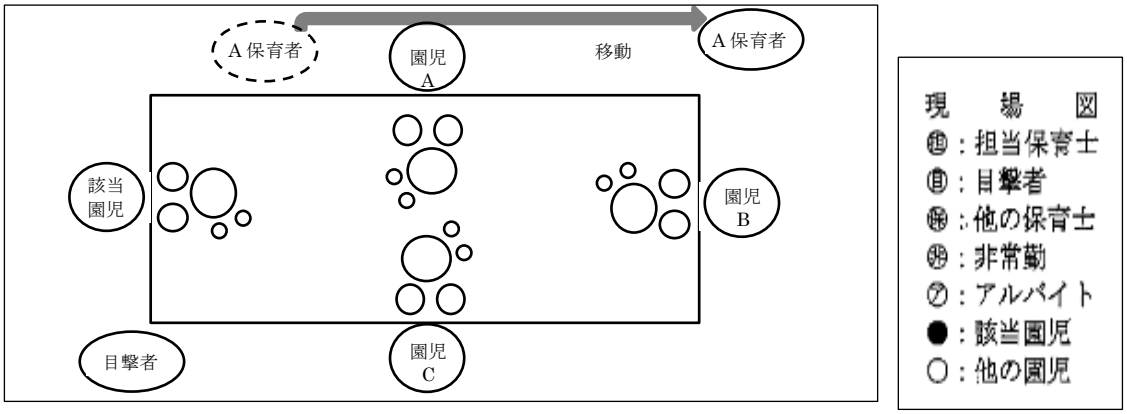
【原因不明の事故発生】

【事例１】　１歳児　　発生時間　11：20

〈発生状況〉

該当園児を含め、園児計４名が一つのテーブルを共有し食事をしていた。その内の２名が先に食事を終えたので、隣の保育室に移動しようとしていた。その為直前まで介助していた保育士と目撃者の保育士が介助を替わった。保育士がスプーンでおかずをすくい食べさせようとすると該当園児が口を開け、その際に口内に金具ホックが入っていることに保育士が気づいた。すぐに口内から金具ホックを取り出し、他にも異物がないか園児の状態を確認した。それ以外の異物は見られなかった。

〈現場図〉



〈原因・問題点〉

・食事介助の際、同テーブルの他児への対応を要し、該当児の周囲も雑然としていた状態で介助を職員間で引き継いだ。複数の子を介助する上で、卓上の確認や児の口内や口の動きをこまめに見たり、引き継ぐ際の状態の把握が不足していた。児の口内からすぐに取り出した直後、園児・周囲の確認を行ったため、事務所への報告が遅れてしまった。

〈その後の改善策〉

・環境整備を行う中で、口に入りやすいもの、破損、欠損、落下物等がないか、こまめな点検を徹底する。また、午前中は支度のために保護者の出入りもあるので、保育で使用する前に必ず保育室を点検する。食事前後は、特に食卓や口内を十分確認し、食事介助の際は子どもの様子に異変がないか常時留意していく。落ち着いた雰囲気で食事を進められるよう、食卓につく児の組み合わせや職員の配置に配慮していく。些細なことでも、日常と違う状況が発生した際は、すぐに事務所に報告する。調理室内では、食材の下処理、調理、配膳の諸工程において目視、指差しと二重の確認を行う。エレベーター内の清掃時に異物が落ちていないか確認をする。調理と保育士双方で異物混入の有無を確認していく。

この事例は、発生時間 11:20 と考えると園内で起こった事故と予測されます。

食事中、口内に異物を発見したが、異物がどこにあり、子どもの口内に入った経緯が曖昧で、原因が不明の事例です。原因が不明の時は、今回の改善策のように職員（調理、保育士共に）でしっかり検証し、考えられる原因や問題点をあらい出し、部署ごとに改善策を話し合っていきましょう。日頃より保育着や調理着などの破損・欠損、遊ぶ場所や室内の点検、引継ぎ事項の声出し確認、調理室内での確認など見落としがないようにしていきましょう。

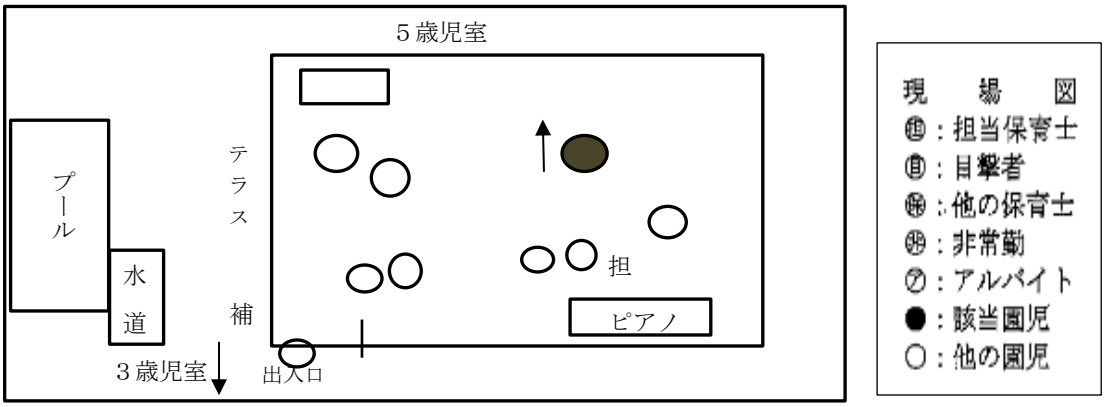
【土曜日保育の安全について】

【事例２】　５歳児　　発生時間　　9：20

〈発生状況〉

担当保育士は園児5名と9時過ぎより3歳保育士からホールに向かい歌遊びを始める。他の保育士は3歳児室で受け入れを行っていた。3歳児室に行かず直接ホールに入室した子と、3歳児室から非常勤保育士と共にホールに合流した子も含めてホールの人数が徐々に増えていた。歌遊びの様子が落ち着かない状況になってきた為、じゃんけん列車のリズム遊びを始めていた。9時１５分過ぎに該当園児が登園し、受け入れ後リュックを背負ったまま入室する。ホールのピアノ方向から5歳児室の方向へ歩いて移動していた該当園児は足元が詰まったように転び床に口元をぶつける。起き上がった該当児の口より出血が見られ、口の中の上前歯2本の歯茎に出血と歯の揺れが見られた。非常勤保育士はホールを出ようとしていた他の園児の対応をしているところだった。

〈現場図〉



〈原因・問題点〉

・登園児の受け入れがまだ終わっていない時間にピアノを弾いて歌遊びからリズム遊びを始めてしまった。その為、受け入れ室とも離れていて保育士間の連携も図りづらい状況も作ってしまった。
・該当園児を含めて土曜保育の登園児は配慮を要する子が複数いるが、担当保育士は日頃していない子接していない子達のいる中でそこを十分に考えずに、その場の流れで異年齢児のリズム遊びを行ってしまった。
・担当保育士はピアノを弾いており子ども達に声掛けが伝わりづらく、傍につくことが出来ない状況の中で、事故が起きてしまった。

〈その後の改善策〉

・受け入れ保育室を離れる等、活動に移る際は受け入れを丁寧に終らせ、保育士間で安全に行うようにする。
・土曜日は配慮が必要な子が登園し、異年齢児との保育になる。日頃から一緒にリズム遊びを行っていない子ども達とその場の流れで活動を行ったことは不適切であった。このことを十分に認識し、安全に遊べる保育を行えるように考慮していく。
・ピアノを弾いていると子どもに声掛けが伝わらなかったり、傍につけないことを十分に考え、活動を止めるなど的確な状況判断をして保育をしていくように気を付けていく。

事例２は、土曜日の受け入れ時に人数も増えてきたため保育士はピアノに向かいリズム遊びを始めたことで、後に登園した児に対し安全な受け入れが出来ず、怪我につながったケースです。土曜日保育は日頃のクラス保育とは異なり異年齢児保育を行うことで、安全な保育の確認や子ども達の健康など綿密に引継ぎを行い、確認をする必要があります。当日は保育の流れや保育士の動きを話し合い細やかな配慮を共有しましょう。また、リスクマネジメント委員会で「土曜日の保育の安全」について検討して職員全体で確認していきましょう。

【園児の体調管理と救急搬送の判断】

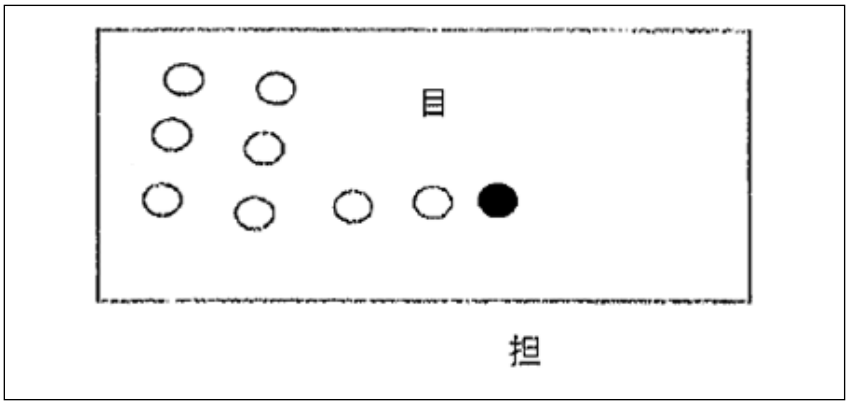
【事例３】プール活動中の発熱

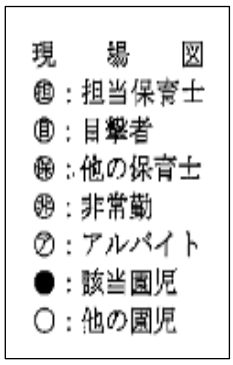
［診　　断　　名］　ヘルパンギーナ　熱中症

［発　生　日　時］　令和５年７月１８日(火)　１０：２５

［クラス・性別］　４歳児クラス　　（　男児　）

［現　　場　　図］





［事故発生状況］

４歳クラス９名で、直前に水分補給をしてからプールに入る。１５分入ってから一度プールサイドに上がり、水分補給を行う。再度プールに入り始めると、本児が「寒い」と保育士に訴える。プールサイドに上がったが、いつもと様子が違うため、シャワーをして着替えをする。

［応急救護処置の内容］

涼しくした部屋でもう一度水分補給をするが、肩を痛がり始める。（３７．９度の発熱）熱中症の可能性あるため、首、脇、股を中心に全身を冷やす。１０分もたたないうちに本児から、頭痛、吐き気を訴え始め、ぐったりしてきて、「目を開けていられない」と本児も話すが、熱が一気に３９．６度まで上がってきて反応が悪くなってきて救急車を呼ぶ。しかし救急につながらず、近隣病院を探してタクシーで行く。

［事故原因・問題点］

保護者と朝の受け入れ時には、元気でプールにも入れるとの確認であった。３連休明けで疲れていることも予想していて、プールに入る際もペアの保育士と一緒にプール内での熱中症も注意していく確認をしていたので、早期に気づき対応した。受診後、保護者から朝、家庭で「寒い」と言っていたとのことで、今回の件を受けて保護者にも、小さな変化でも視診時に伝えてもらえるように周知する必要が再度あると感じた。

［その後の改善策］

子どもの小さな変化や、体調の変化にすぐに気づけるように声を出して職員で共有し、対応していく。酷暑が続いているので、救急車が呼べなかった時の対応や救急病院を全職員で再度確認していく。複数人具合が悪くなることや、職員が熱中症になるなど様々なパターンを想定して、対応策を考えていく。

［園長意見］

・今回の状況を全職員で共有した。救急対応のマニュアルをもう一度見直し、今回の事例から得たことを踏まえ、より活用しやすいものに改良中である。マニュアルができたら、リスクマネジメントグループを中心に、マニュアルを用いて実際に職員が動いてシミュレーションする研修を行い、誰もがその時にいる職員と連携をとって対応できるようにしておく。

・プールの有無の判断や子どもの体調把握の仕方等、全体で確認をしたり、職員一人ひとりが意識をもって行ったりしているが、今一度こういったことが起こりうるということを念頭におき、都度、複数での判断・把握・声を出しての確認を行っていく。

～看護師のコメント～

プール活動中に体調不良を訴えた園児の症状が急激に悪化し、１１９番通報したところつながらず、タクシーで近隣病院を受診した事例です。

熱中症のときは、

① 涼しい場所に移動させる

② からだを冷やす

③ 水分・電解質の補給が基本です。

今回は熱中症の基本的な対応をとることができました。本児はヘルパンギーナも併発していたため、体調不良時は様々な可能性を考えて、本人の訴えに耳を傾け、全身状態を観察するとよいでしょう。本人が寒いと訴えているときは、さらに体温が上昇するので温め、体温が上がりきってから冷やすと効果的です。

本児の症状が急変して救急車を呼んだのは良い判断です。今回は近医に受診することができてよかったです。救急車の要請が急増し、すぐに電話がつながらない場合があります。対応方法として以下を参考にしてください。

① １１９番通報：込み合ってすぐに出られないことがあるが、順番につないでいるのでそのまま切らずにコールを続ける。

② 世田谷消防署本署、地域の消防署出張所に電話をして、救急車を手配してもらう。

③ 緊急性に迷ったときには＃７１１９に相談をする。＃７１１９の電話対応は、看護師で状況確認の上、対応のアドバイスや病院の紹介をしてくれる。

【園児の特性をふまえた環境整備】

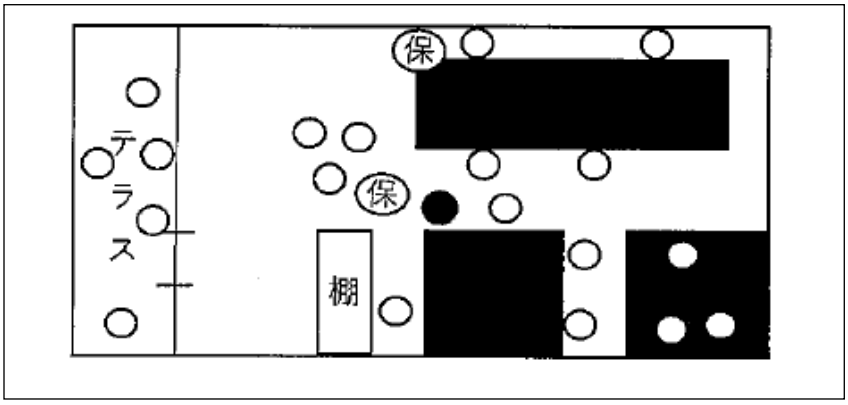
【事例４】年長児、工作活動中の誤飲

［診　　断　　名］　誤飲

［発　生　日　時］　令和５年６月９日(金)　１０：３０

［クラス・性別］　５歳児クラス（男児）

［現　　場　　図］



［事故発生状況］

複数人が素材の箱から好きな素材を選び、工作をしていた。工作で友だちが切ったストロー（１㎝程度）を口に入れ誤飲。その後、自分で違和感を感じ水を飲んだ。発生時間５０分経過した頃、保育士に「ストローを飲んだ」と報告。まだ喉に違和感があることを訴える。

［応急救護処置の内容］

椅子に座らせ、目視で異物がないか確認。

［事故原因・問題点］

・保育室内に保育士が２人いたにも関わらず、それぞれが見守る場について事前に声を掛け合っていなかったために、工作をしている子どもたちから目を離す時間帯が発生してしまった。

・子どもの行動予測として、小さいものや玩具を口にいれる可能性があるという予測が足りなかった。

・玩具、用具の遊び方や使い方に関して、口に入れない等の安全教育が足りていなかった。

［その後の改善策］

・その日の活動について保育士同士で職員配置の確認を行い、危険な行動を見落とさないよう安全な保育環境を整える。

・日々の保育の中で子どもの行動を予測し、小さいものを扱う際にはいつも以上に注意して見守る。

・玩具や用具の扱い方を子どもと再度確認し、口に入れてしまうことの危険等を伝えながら注意喚起していく。

［園長意見］

・誤飲は命にかかわる重大な事故につながる。このことを踏まえ、５歳児クラスだか

ら大丈夫といった思いこみは持たず、再度素材選びや職員の配置については事前に打ち合わせを行い、安全な保育環境を整えるよう話し合った。

～看護師のコメント～

この事例は、工作中にストロー（１㎝大）を誤飲し子どもが違和感を訴えた事例です。保育園では子どもが工作をする機会が多くあり、色々な材料を使用します。異物誤飲は窒息をしたり臓器を傷つけたりしてしまうこともあるので、十分気を付けることが必要です。誤飲したものによって対処法は異なります。この事例以外にも、チェーリングやクレヨン等の誤飲もありました。医療機関や中毒センター等に問い合わせて対応を相談することもできます。また、職場で気道異物除去法を訓練し、適切な対応ができるようにしましょう。誤飲が起きた時の対応、処置は下記を参考にしてください。

〇日本中毒情報センター

つくば中毒１１０番　029-852-9999

大阪中毒１１０番　　072-727-2499

〇こども医療電話相談　#8000

〇保健マニュアル　以下抜粋

（１０）誤飲し、のどに異物がつかえた　　参考資料：乳幼児の異物除去

近隣の医療機関一覧(中毒 110 番)

① 急に激しい咳を繰り返したり、嗄声(かすれ声)になった時は、気道に異物が入ったことが疑われる

② 気道内異物除去を行っても、異物が出てこない時や、子どもの状態が悪い時は、同時に救急車を手配する

※ 誤飲のおそれがあるもの(口に入ってしまうような小さい玩具以外で)

・洋服やぬいぐるみなどについているボタン

・玩具のはずれた部品や壊れた破片など

＊子どもは食べるつもりはなくても口に入れてみたりすることがある。特に３歳くらいまでは口に入れて性質を知ろうとするので、常に環境整備を心がける。口にした時は飲み込まないよう配慮しつつ、口の中をすぐに確認して取り出す

＊ボタン電池(リチウム電池)は電気分解によりできたアルカリ性の液で容易に腸管の壁を傷つける

例えば、２個以上の磁石を誤飲すると、消化管の壁を挟むようにくっつき、壁に穴を開けてしまう恐れがあるため要注意です。